

経済と経営 30-1 (1999. 6)

〈論文〉

自己意識と自由 (4)

——ヘーゲル『精神現象学』(「自己意識」論) 図解——

高 田 純

〈目 次〉

I	はじめに	
II	自己意識の本性	(第 29 巻第 1 号)
III	自己意識と生命	(第 29 巻第 3 号)
IV	自己意識と他の自己意識	(第 29 巻第 4 号)
V	自己意識と相互承認	(本 号)
VI	承認の闘争	
VII	主人と奴隷	
VIII	相互承認と共同体	

V 相互承認の弁証法

〈全訳〉

- [1) 「A 自己意識の自立性と非自立性。支配と隷属」 <109>

[a 自己意識と承認]

[26] 自己意識が即自的かつ対自的に存在するのは、それが或る他の自己

意識に対して即自的かつ対自的に存在するばかり、またこのことをつうじてである。すなわち、自己意識は承認されたものとしてのみ存在する。このように自分を二重化しながら in seiner Verdopplung 自分を統一する自己意識の概念、すなわち自己意識において自己を実現する無限性の概念は、多くの側面や多くの意味が交差したものである。そのため、その諸契機は一部には厳格に「相互に」区別されなければならないが、一部には、このように区別されながらも同時にまた区別されていないものとして、あるいはつねに反対の意味において、理解され、認識されなければならない。区別されたものの二義性 Doppelsinnigkeit は、無限であるという自己意識の本質に根ざし、あるいは自己意識がもつ規定性とは正反対のものであるという本質に根ざす。二重化されながらこのように精神的に統一している「自己意識の」概念を分析するならば、〈我々に〉承認の運動が呈示されてくる。／

〔自己意識の二重性 〈二重化された自己意識〉〕

[27] 自己意識に対して或る他の自己意識があい対している。[このばかり] 自己意識は自分の外部に出ている。このことは二重の意義 gedoppelte Bedeutung をもつ。第一に、自己意識は自分自身を喪失する。というのは、それは自分を或る他の（別の）存在者 ein anderes Wesen として見出すから (142) である。[だが] 第二に、自己意識はそれと同時に他者（他の自己意識）das Andere を廃棄してしまっている。というのは、それは他者をもまた「自分とは別の自立的な」存在者 Wesen とはみずに、他者のなかに自分自身をみるからである。／

[28] 自己意識はこのような自分の他在 dies sein Anderssein を廃棄しなければならない。このことは[上述の] 第一の二重の意味 Doppelsinn を廃棄することであり、したがってそれ自身、第二の二重の意味をもつ。第一に、自己意識は自分を「自立的な」存在者であると確信するようになるために、他の自立的存在者を廃棄することへと向かわなければならない。第二に、自

己意識はこのことによって自分自身を廃棄することへ向かう。というのは、このような他の存在者 *dies andere* は自己意識自身であるからである。／

[29] 自己意識が自分の二重の意味の *doppelsinnig* 他在をこのように二重の意味で廃棄することは、同時に二重の意味で自分自身へ還帰することである。というのは、第一に、自己意識は「自分の他在を」廃棄することによって自分自身を取り戻す。というのは、自己意識は自分の他在を廃棄することによって再び自分と等しくなるからである。しかし、第二に、これと同様に、自己意識は自分に他の自己意識を再び与え返す。というのは、自己意識は他の自己意識 *das andere* のなかでこそ自分であったからである。自己意識は他の自己意識のなかでこの「個別的」自分のあり方を廃棄し、したがって他の自己意識を再び自由にさせる。／

[30] ところで、自己意識が或る他の自己意識に関係しながらおこなう運動は、このような仕方で行方 *das Tun des Einen* として表象された。しかし、一方によるこのような行為はそれ自身二重の意義をもっており、自分の行為であるとともに他方の行為 *das Tun des Anderen* である。というのは、他の自己意識 *das andere* は同様に自立的であって、自分のなかで完結しており、他方自身によって生じないことは他方のなかになにも起こらないからである。一方の自己意識は、最初に欲求に対して存在していたにすぎないような対象を眼前にもつのではなく、対自的に存在する自立的な或る対象を眼前にもつ。このため、一方が自分のがわでおこなうことをこの対象が自分自身のがわでおこなわないばあいには、一方は自分ではこの対象になにも力を及ぼすことはできない。したがって、運動は端的に両方の自己意識の二重の運動である。両方のうちの各々は、自分がおこなうことと同一のことを他者（他の自己意識）*das andere* がおこなうのを見る。各々は、自分が他者に要求することを自分でおこなう。したがって、各々が、自分でおこなうことをおこなうのは、他者が同一のことをおこなうかぎりである。生じるべきことは両者によってのみもたらされうるのであるから、一方的な行為は効

力をもたないであろう。／

[31] したがって、行為が自分に対する行為であるとともに、他方に対する行為であるという点で、行為は二重の意味をもつだけではなく、行為が分離されることなく、一方の行為であるとともに、他方の行為であるという点でも、行為は二重の意味をもつ。／

[32] この運動においては、[さきに悟性の箇所で、二つの] 力の遊動 Spiel として叙述された過程が、ただし [今度は] 意識のなかで繰り返されているのがみられる。この遊動において〈我々に対して〉おこなわれたことが、ここでは両極 Extreme [両者の自己意識] 自身に対しておこなわれる。[ここでは] 媒介者 (中項) Mitte は自己意識であるが、これは両極 (両項) に分裂する。各々の極は、その規定性をこのように交換し、反対物へ絶対的に移行するものである。ところで、各々の極は意識としてはたしかに自分の外部に出るが、しかし、それはこのように自分の外部にありながらも同時に自分のなかにとどまっており、自分に対して [対自的で] ある。各々がこのように自分の外部にあるというあり方が各々に対してある [意識されている]。各々がそのまま直接に他の意識であるとともに、そうではないということが自分に対してある。また、同様に、この他者 dies Andere は、自分だけで (対自的に) 存在するものとしての自分を廃棄することによってのみ、自分に対して (対自的に) 存在するのであり、その他者 das anderen [他者の他者、すなわち一方の自己意識] の対自的 [自立的に] 存在においてのみ対自的に [自立的に] 存在するのであるが、このことが各々に対してある [意識されている]。各々は他者にとって媒介者 Mitte であり、この媒介者をつうじて各々は自分を自分自身と媒介し vermitteln, (推論的に) 連結する zusammenschließen。各々は自分と他者とに対して、直接的な (媒介されない) unmittelbar, 対自的に [自立的に] 存在する存在者であるが、この存在者は同時にこの媒介をつうじてのみこのように対自的に存在するのである。両者は相互に承認しあうものとして、承認しあう sich anerkennen, als gegenseitig sich anerken-

nend。／

[33] 承認のこの純粋な概念、自己意識が自分を統一しながら二重化するという概念は今や、その過程が自己意識に対して現象するがままに考察されなければならない。この概念はさしあたりは、両者の自己意識が不平等であるという側面を表すようになろう。いいかえれば、媒介者が両極[両者の自己意識]のなかに現れ出て、両極が両極として相互に対立すること[承認の闘争]、また、一方はもっぱら承認されたものであるが、他方はもっぱら承認するものであること[主人と奴隷の関係]を表すようになろう。／」

1 相互承認の一般構造

「A 自己意識の自立性と非自立性。支配と隷属」の節は、内容的にみると、 α)相互承認の一般構造、 β)承認をめぐる闘争 Kampf um Anerkennung、それに γ) 本来の意味での支配と隷属 Herrschaft und Knechtschaft (主人と奴隷 Herr und Knecht)の考察を含む。この節にさきだつ序論的部分では、II-IVでみてきたように、自己意識が自分を自立的なものとして直観するための対象が事物的なものではなく、他の自己意識であることが明らかにされたが、この節の α) では、さらに、自己意識が他の自己意識のなかで自分を自立的なものとして直観できるのは、他の自己意識によって承認されることによってであることが導出される。

「自己意識が即自的かつ対自的に存在するのは、それが或る他の自己意識に対して即自的かつ対自的に存在するばあい、あるいはこのことをつうじてである。すなわち、それは[他者によって]承認されたものとしてのみ存在する。」「二重化されながらこのように精神的に統一している[自己意識の]概念を分析するならば、〈我々に対して〉承認の運動 Bewegung des Anerkennens が呈示されてくる。」[26]

そして、4で示されるように、承認の実現過程が「承認をめぐる闘争」と

して説明され、そのさしあたりの解決としての不平等な承認関係が支配—隷属の関係として叙述される[33]。したがって、承認はA節全体を貫く基本テーマであり、序論的部分はそれを導くためのものであるといえる。このことは後期の「小現象学」では、より明確にされており、この節に対応する箇所は「a. 承認する自己意識」と題され、その内部で承認の闘争と支配—隷属関係とが扱われる（中期の『予備学』でも同様である）⁽¹⁾。

さて、すでにみたように、ヘーゲルは自己意識を無限の概念の具現とみなしている。自己意識は自分を他の自己意識として区別しながら、そのなかで自己統一を維持するのであり、この点で無限である。自己意識にとって他の自己意識は二重性をもっている。それは一面では自己意識自身から区別され、これとは異なったものであるが、同時に他面では自己意識の表現であり、けっきょくは自己意識自身であって、自己意識からは区別されない。一面はつねに他面をともなっており、一面の考察は他面の考察へと転化せざるをえない。

「このように自分を二重化しながら自分を統一する自己意識の概念、すなわち自己意識において自己を実現する無限性の概念は、多くの側面や多くの意味が交差したものである。そのため、その諸契機は一部には厳格に[相互に]区別されなければならないが、一部には、このように区別されながらも同時にまた区別されていないものとして、あるいはつねに反対の意味において、理解され、認識されなければならない。区別されたものの二義性は、無限であるという自己意識の本質に根ざし、あるいは、自己意識がもつ規定性とは正反対のものであるという本質に根ざす。」[26]

ヘーゲルは以下の部分では、自己意識の二重性の分析、さらには他の自己意識に対するその二重の関係の分析をつうじて、承認の必然性を説明する。では、まず、自己意識の二重性の考察から他の自己意識に対する二重の関係の考察へ進み([27]—[29])、さらにそこから自己意識と他の自己意識とのあいだの相互承認を導出する([30]—[32])。この叙述部分は、自己意識の相互主観性、共同性を緻密な論理によって説明している点で、『精神現象学』全体

においても重要な意味をもつ。

2 自己意識の他の自己意識に対する二重の関係

自己意識は自分を自分自身と他の自己意識とに二重化するが、他の自己意識も自己意識にとって二重の意味をもつ。他の自己意識は一方では、自己意識とは区別され、自己意識と対立するものであるが、他方では自己意識自身である。したがって、自己意識は他の自己意識に対して二重にかかわる。この点についての考察は高度に抽象的であるが、つぎのような三段階をたどる。

① 自己意識(S)はまず他の自己意識(A)を、自分の外部にあり、自分とは別なものとみなすので、他の自己意識において自分が否定されていると思ひ込む。 $\langle S^- = A^+ \rangle$

「自己意識に対して或る他の自己意識があい対している。[このばあいまず] 自己意識は自分の外部に出ている。このことは二重の意味をもつ。第一に、自己意識は自分自身を喪失する。というのは、それは自分を或る他の存在者 Wesen として見出すからである。」[27]

だが、反面で、自己意識は他の自己意識を自分とは別のものとはみなさずに、そのなかに自分を見出そうとする。そのため自己意識は、自分とは別な存在者としての他の自己意識を否定しようとする。 $\langle S^+ = A^- \rangle$

「第二に、自己意識はそれと同時に他者[他の自己意識]を廃棄してしまっている。というのは、それはこの他者をも[自分とは別の自立的な]存在者 Wesen とはみずに、他者のなかに自分自身をみるからである。」[27]

両面をまとめると、 $\langle S_{\mp} = A_{\pm} \rangle$ となる。

② しかし、自己意識の他の自己意識に対するこのような否定的なかかわりは素朴すぎる。他の自己意識は自己意識と対立したもののようにみえるが、より深く理解すれば、他の自己意識はじつは自己意識自身の表現である。他の自己意識は自己意識とは異なったものでありながら、同時に自己意識自身

でもあるという二重性をもつのである。したがって、自己意識が他の自己意識を否定することは、他の自己意識のこのような二重性を否定することになり、二重の意味をもつ。

「自己意識はこのような自分の他在 *dies sein Andersein* を廃棄しなければならない。このことは〔上述の〕第一の二重の意味を廃棄することであり、したがってそれ自身、第二の二重の意味をもつ。」[28]

①の $\langle A \rangle$ はここでは $\langle A^{\pm} \rangle$ を意味することとなり、SのAに対する二重の関係 $\langle S_{\mp} = A^{\pm} \rangle$ は逆の二重の関係となる $\langle S^{\pm} = A_{\mp} \rangle$ 。

ところで、厳密に言えば、自己意識が否定しなければならないのは、「他者 *das Andere*」(他の自己意識)そのものではなく、「他在 *Anderssein*」である。ヘーゲルは「他者 *das Andere*」と「他在 *das Anderssein*」とを区別している。それでは、「他在(他者というあり方)」はなにを意味するのであろうか。これについては二様の解釈が可能である。まず、それは、「他者のあり方」を意味すると考えられる。このばあいには、「他在」は他者の属性にすぎないから、後続の叙述を整合的に解釈するためには、自己意識の他在に対する関係はつぎのようなものと理解されなければならない。すなわち、自己意識が他在を否定することは、他者そのものを否定することではなく、自己意識と対立する他者の \langle 異他性 *Anderheit* \rangle や \langle 疎遠性 *Fremdheit* \rangle を否定することを意味する。しかし、ヘーゲルはたんに「他在 *das Anderssein*」ではなく、「自分(自己意識)の他在 *sein Anderssein*」という表現を用いている。ここでは、他在はたんに「他者のあり方」ではなく、自己意識自身の「異なったあり方」を意味するであろう。自己意識がこのような他在を否定することは、他者において自分と対立した自分のあり方を否定することを指すであろう。自己意識の他在としての他の自己意識は自己意識のいわば \langle 異姿 \rangle であるから、自己意識とは異なったものであるとともに、自己意識自身である。このような二重性をもつ他在を自己意識は否定する、とヘーゲルは述べるのである。

しかし、事柄は錯綜している。いずれにしても、他在は他の自己意識にお

けるものであって、他者のあり方としての他在と、自分自身のあり方としての他在とは当の自己意識にとっては容易には区別できない⁽²⁾。しかも、自己意識は他在を自分自身のあり方とみなさないだけではなく、他の自己意識がもつ異他性や疎遠性を他の自己意識の自立性と同一視し、さらには他の自己意識そのものと同一視してしまう。

「第一に、自己意識は自分を「自己的な」存在者であると意識するために、他の自立的な存在者を廃棄することへと向かわなければならない。」[28]
このことはつぎのように表式化できる。 $\langle S^+ = (A^+)^- \rangle$

だが、他の自己意識は自己意識の表現（異姿）であるから、自己意識が他の自己意識の自立性を否定するならば、自分自身を否定することになる。

「第二に、自己意識はこのことによって自分自身を廃棄することへ向かう。というのは、この他者（他の存在者）dies andere は自己意識自身であるからである。」[28]

ここでは、さきの表式とは逆のものが成立する。 $\langle S^- = (A^-)^+ \rangle$ 。

両面を合わせれば、つぎのような表式がえられる。

$$S^\pm = (A^\pm)^-$$

これは形式上は①の $\langle S^\pm = A^\mp \rangle$ への復帰である。しかし、このことはつぎのようなより進んだ内容を含む。

③ 一面で、自己意識は他の自己意識の疎遠性、あるいは自分の異他性を否定することによって、自立的なものとしての自分を取り戻す。ただし、このように回復される自分はもはや、かつてのような直接的、個別的あるいは排他的なものではなく、つぎにみるように、他の自己意識との対立を克服した普遍的なものである。

「自己意識が自分の二重の意味の他在をこのように二重の意味で廃棄することは、同時に二重の意味で自分自身へ還帰することである。というのは、第一に、自己意識は「自分の他在を」廃棄することによって自分自身を取り戻す。というのは、自己意識は自分の他在を廃棄することによって

再び自分と等しくなるからである。」[29]

したがって、②における $\langle S^+ = (A^+)^- \rangle$ は $\langle S^+ = A^- \rangle$ となる。

他面で、他の自己意識は自己意識の〈異姿〉であって、他の自己意識が自立的でなければ、自己意識は他の自己意識のなかで自分を自立的なものとして見出すことはできない。自己意識は他の自己意識を再び、自立的なものとして扱わなければならない。そのためには、自己意識は、他の自己意識と対立するような自分の個別的、排他的あり方（「このあり方」）を否定しなければならない。さきに、他者の疎遠性（自分の他在性）の廃棄によって回復した自分は、排他性を克服した自分なのである。

「しかし、第二に、これと同様に、自己意識は他の自己意識に自分をえさせる。というのは、自己意識は他の自己意識のなかでこそ自分であったからである。自己意識は他の自己意識のなかで自分のこの〔個別的〕あり方を廃棄し、したがって他の自己意識を再び自由にさせる。」[29]

②における $\langle S^+ = (A^+)^- \rangle$ は今度は $\langle S^+ = A^- \rangle$ となる。

ところで、 $\langle S^+ = A^- \rangle$ と $\langle S^- = A^+ \rangle$ とは別々なものではなく、表裏一体のものである。自己意識が他の自己意識を否定することによって自分を肯定するが $\langle S^+ = A^- \rangle$ 、このことはそれだけとして無媒介には実現されない。自己意識はいったん自分の排他的、利己的なあり方を否定して、他の自己意識を肯定しながらも ($\langle S^- = A^+ \rangle$)、他の自己意識におけるこのような自己否定をさらに否定することを媒介にして、他の自己意識のなかで自分を非利己的なものとして肯定することができるのである ($\langle S_{\mp} = A_{\pm} \rangle$)。

3 承認の相互性

ヘーゲルは自己意識の他の自己意識に対する二重のかかわりについて以上のように考察したあとで、この二重のかかわりは自己意識と他の自己意識とのあいだで相互的におこなわれることを明らかにし、これを「相互承認

gegenseitiges Anerkennen」ととらえる。

a) 自己意識は他の自己意識に対して肯定的および否定的にかかわり、そのさい自分に対しては逆に否定的および肯定的にかかわる。ところで、他の自己意識は、欲求の対象のような受動的なものではなく、一方の自己意識と同様に能動的なものである。他の自己意識も同様に、一方の自己意識に対して肯定的および否定的にかかわり、これをつうじて自分に対して否定的および肯定的にかかわる。このようにして、一方による他方への、また自分へのかかわりと、他方による一方への、また他方自身へのかかわりとは相互的におこなわれる。

「自己意識が或る他の自己意識に関係しながらおこなう運動は、このような仕方で一方の行為 *das Tun des Einen* として表象された。しかし、一方によるこの行為はそれ自身二重の意義をもっており、自分の行為であるとともに他方の行為 *das Tun des Anderen* である。というのは、他者(他の自己意識) *das andere* は同様に自立的であって、自分のなかで完結しており、他方自身によって生じないことは他方のなかになにも起こらないからである。一方の自己意識は、最初に欲求に対して存在していたにすぎないような対象を眼前にもつのではなく、対自的に存在する自立的な或る対象を眼前にもつ。このため、一方が自分のがわでおこなうことをこの対象が自分自身のがわでおこなわないばあいには、一方は自分ではこの対象になにも力を及ぼすことはできない。したがって、運動は端的に両方の自己意識の二重の運動である。」[30]

b) 一方の自己意識は他方の自己意識にかかわると同時に、自分自身にかかわるが、一方のこのような二重のかかわりが遂行されるのは、他方も同様にその他者としての一方の自己意識と自分とに二重にかかわることをつうじてである。このように、一方の自己意識における二重の行為は他方とのあいだで相互的におこなわれるのであり、〈二重の二重性〉をもつ。

「したがって、行為は自分に対する行為であるとともに、他方に対する

行為であるという点で、二重の意味をもつだけではなく、行為が分離されることなく、一方の行為であるとともに他方の行為であるという点でも、二重の意味をもつ。」[31]

このことについての詳細な説明はないが、これまでみたことと関連させると、つぎのように理解することができよう。まず、一方の自己意識(S)が自分自身と他方の自己意識(A)とへ二重にかかわることについて確認しておこう。一方の他方へのかかわりと自分へのかかわりとは逆の方向をもつ。一方は他方のなかで自分を自立的なものとして肯定するためには、他方の自立性を否定しなければならないが $\langle S^+ = A^- \rangle$ 、このことが遂行されるのは、一方が他方のなかでいったん自分の自立性を否定すること $\langle S^- = A^+ \rangle$ をつうじてである。すなわち、一方は他方へ否定的にかかわることによって、自分へ肯定的にかかわるが、同時に、一方は自分へ否定的にかかわることによって他方へ肯定的にかかわるのである $\langle S^+ = A^- \rangle$ 。

つぎに、一方の他方と自分への二重のかかわりと、他方の一方と自分への二重のかかわりとが同時に二重に遂行される。一方が他方を否定し、そのなかで自分を肯定すること($\langle S^+ = A^- \rangle$)は一方のがわの行為によってのみ遂行されるのではない。他方が一方のために自分を否定する($\langle A^- = S^+ \rangle$)ばあい、一方は他方のなかで自分を肯定することができるのである($\langle S^+ = A^- \rangle$)。すでにみたように(IV-B-2)、一方の自己意識が自分を実現するための対象としての他の自己意識は、一方のために自分を否定するという本性をもっていた。他方がを否定し、一方を肯定することは、今や具体的に、他方が一方を「承認する」ことととらえられる。このように、 $\langle S^+ = A^- \rangle$ と $\langle A^- = S^+ \rangle$ とは相互におこなわれる。

ところで、他方の自己意識も一方の自己意識の自立性を否定してそのなかに自分を自立的なものとして見出そうとする($\langle A^+ = S^- \rangle$)。そして、このことが遂行されるのは、一方も他方のために自分を否定し、他方を「承認する」ばあいである($\langle S^- = A^+ \rangle$)。

以上のようにして、一方が他方によって肯定され、承認されることによって ($\langle A^- = S^+ \rangle$)、一方は他方のなかで自分を肯定できるのであるが ($\langle S^+ = A^- \rangle$)、そのためには、一方も自分を否定して、他方を承認しなければならない ($\langle S^- = A^+ \rangle$)。したがって、2-③における $\langle S^\pm = A^\mp \rangle$ は今や $\langle A^\pm = S^\mp \rangle$ と相互的であることが明らかになる。両面を合わせるとつぎのように表式化できる。

$$S^\pm \text{ --- } A^\pm$$

一方は他方を承認することによって、自分もまた他方から承認されるのであり、一方は、自分自身を承認してくれるものとして他方を承認するのである。逆に、他方が一方を承認するのは、他方自身を承認してくれるものとしてである。ここに意味でつぎのようにいわれる。

「両者は相互に承認しあうものとして、承認しあう *sich anerkennen, als gegenseitig sich anerkennend.*」 [32]

c) 一方の自己意識は自分にかかわり、自分に対して(対自的に)存在するが、このことは他方の自己意識への関係によって媒介されている。すなわち、一方は他方において自分を否定しながら、この否定をさらに否定して、自分を肯定する。しかし、一方の他方におけるこのような自分の否定の否定としての自己肯定は一方の側だけでは遂行されない。このような一方の行為が可能となるのは、他方も一方との関係において同様に自己否定の否定としての自己肯定をおこなうばあいである⁽³⁾。

まず、α) 一方の自己意識は他方の自己意識を対象とするが、意識(対象を意識するだけのもの)としての自己意識にとっては、他方の自己意識はたんに自分の外部に、自分から独立して存在するものとして現れる。だが、他方はじつは一方の表現 (\langle 異姿 \rangle) であるから、一方は他方のなかにありながらも、同時に自分でありつづける。このように、一方(S)は他方(A)を媒介にして、自分自身にかかわる。ここには $\langle S - A - S \rangle$ という推論関係 *Schluß*

がある。

「[ここでは] 媒介者 (中項) Mitte は自己意識であるが、これは両極 (両項) beide Extreme に分裂する。……各々の極は意識としてはたしかに自分の外部に出るが、しかし、それはこのように自分の外部にありながらも同時に自分のなかにとどまっており、自分に対して (対自的) である。各々がこのように自分の外部にあるということあり方が各々に対してある [意識されている]。各々がそのまま直接に (無媒介に) 他の意識であるとともに、そうではないということが各々に対してある。」 [32]

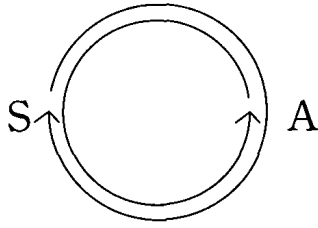
β) 同様のことが、他方の一方への関係についてもいえる。他方の自己意識も一方を媒介にして、自分自身にかかわり、対自的に (自立的、自覚的に) 存在する ($\langle A-S-A \rangle$)。

「また、同様に、この他方の自己意識は、自分だけで (対自的に) 存在するものとしての自分を廃棄することによってのみ、自分に対して (対自的) に存在するのであり、その他者 [他者の他者、すなわち一方の自己意識] の対自的 [自立的] 存在においてのみ対自的に存在するのであるが、このことが各々に対してある [意識されている]。」 [32]

γ) このように、両者の自己意識とは相互連関、相互作用の関係にあるため、いずれのがわから出発しても、他方を媒介にして、自分にかかわり、自分と (推論的に) 連結することができるのである。

「各々は他者にとって媒介者 Mitte であり、この媒介者をつうじて各々は自分を自分自身と媒介し vermitteln, (推論的に) 連結する zusammen-schließen. 各々は自分と他者とに対して、直接的な (媒介されない), 対自的に [自立的に] 存在する存在者である。この存在者は同時にこの媒介をつうじてのみこのように対自的である。」 [32]

これを図式化するとつぎのようになる。



4 承認の運動

以上で明らかにされたのは、「承認の純粋な概念」であり、承認の一般的、論理的構造である。承認は本質的に相互的である。自己意識は他の自己意識によって承認され、また他の自己意識を承認することをつうじて自分を実現する。それでは、このような相互承認はどのような過程をたどって遂行されるであろうか。ヘーゲルはこの遂行の過程を、「承認をめぐる闘争」と、「支配と隷属(主人と奴隷)」との2段階に分けて考察する。

「承認のこの純粋な概念、自己意識が自分を統一しながら二重化するという概念は今や、その過程が自己意識に対して現象するがままに、考察されなければならない。この概念はさしあたりは、両者の自己意識が不平等であるという側面を表すようになろう。いいかえれば、媒介者が両極〔両者の自己意識〕のなかに現れ出て、両極が両極として相互に対立すること〔承認の闘争〕、また、一方はもっぱら承認されたものであるが、他方はもっぱら承認するものであること〔主人と奴隷の関係〕を表すようになろう。」

[33]

自己意識のあいだの平等な相互承認は、6でみるように、人倫的共同体においてもたらされるのであるが、「自己意識」の章では、それに至る前段階としてさしあたり、自己意識が承認をめぐる闘争する段階、主人と奴隷という不平等な承認関係の段階が扱われる。

ヘーゲルはしばしば「承認の運動」[26]や承認の「過程」[33]を「承認の闘争」と同一のものとして扱っている。承認の闘争は、利己的、排他的な自己意識が他の自己意識を承認せずに、一方的に他の自己意識から承認をえ

ようとするところから生じる。自己意識が他の自己意識のなかで自分を自立的なものとして見出すことは、他の自己意識と対立するその排他的な個別性を克服するという自己否定を媒介する。すなわち、他者における自己肯定は他者における自己否定によって媒介される。しかし、この自己否定をへずに、自己意識が直接・無媒介に他者のなかに自分を肯定しようとするとき、同様のことをめざす他の自己意識と衝突せざるをえない。このように、承認の実現は闘争という形態をとるのである。

5 愛と承認の闘争

a) 『精神現象学』以外の著作や論稿では、相互承認の構造はそれ自体としては説明されておらず、承認の闘争との関係で言及されている。『エンチュクロペディー』の「小現象学」ではつぎのようにいわれる。

「自己意識は〔他の〕或る自己意識に対してさしあたりは直接に他者に対する他者として存在する。私は自我としての他者のなかに私自身を直観する。しかし、私はこの他者のなかにまた、直接に現存し絶対的に私に対して自我として独立に存在するような他の客体を直観する。自己意識の個別性の廃棄は最初の廃棄であったが、自己意識はこのことによってはたんに特殊なものとして規定されるにすぎない。ここには矛盾があり、自分を自由な自己として示し、他者に対してこのようなものとして現存しようとする衝動がこの矛盾から生じる。これが承認の過程である」(Enz. § 430)。

「承認の過程は闘争である。というのは、他者が私に対して直接的な他の現存在であるかぎり、私は他者のなかに私を私自身として知ることはできないからである。そこで、私は他者のこのような直接性を廃棄しようめざす」 (§ 431)。

自己意識が、事物を対象とする欲求から、他の自己意識を対象とする自己意識へ移行したさいには、たしかにそれはもはやたんに直接的で個別的なも

のではなくなっている。自己意識は他の自己意識のなかに普遍的なものとして自分を直観するのであり、このようなものとして他の自己意識から承認される。そのばあい、自己意識と他の自己意識とはもはや相互に対立はしない。しかし、自己意識はさしあたりは、まだ特殊的なものとどまり、そのため他の自己意識は、自己意識と対立する自立的なものとして現れる。自己意識はその特殊性(排他性、利己性)を克服しないまま、直接に他者のなかに自分を自立的なものとして直観し、他者から承認をえようとするとき、他者の自立性を廃棄へ向かうのであり、他者との闘争に入る。

『予備学』(1808-1809年の講義)でもつぎのようにいわれる。

「一方の自己意識が他方の自己意識に対して存在するが、それは他方の自己意識にとってのたんなる客体としてではなく、自分の他の自己として存在する。……自我は他者のなかに自分自身を直観する」。「一方の自己意識が他方の自己意識のなかにこのように自分を直観することは、1) 自同性という抽象的契機[をなす]。2) しかし、各々の自己意識は他者に対して外的な客体として、またそのかぎりで直接的、感性的、および具体的な現存在として現象するという規定性をもつ。3) 各々は他者に対して絶対的に対自的[自立的]であり、個別的であるが、しかも他者に対しても、このようなものであることを要求する……。すなわち、対自的に存在するものとしての自分自身の自由を他者のなかに直観すること、あるいは他者から承認されることを要求する」(Pro. 119, 武市訳, 142 頁以下。海老澤訳, 39 頁)⁽⁴⁾。

b) 『精神現象学』にさきだつ二つの『イエナ精神哲学』では、すでにみたように(IV-C-2), 個人は愛において他の個人のなかに自分を直観するといわれた。ここでは或る種の承認が実現されている。しかし、愛においては個人は他者のなかに自分を、本来の意味で自立的なものとして直観するのではない。個人は自立性を求めて、家族の外部に出て(あるいは家族を代表して)、他の家族からの独立をめざす他の個人との関係に入る。『イエナ精神哲

学Ⅰ』では、つぎのようにいわれる。

「家族において意識は全体〔個別的全体〕に到達したが、この全体が他の意識の同様な全体のなかで……自分を自分自身として認識することは絶対に必然的（必要）*notwendig*である。このような認識において各々は他者に対して直接に、絶対的に個別的なものとして現存する。各々は他者の意識のなかに自分を定立し、他者の個別性を廃棄する。あるいは、各々は自分の意識のなかに他者を意識の絶対的個別性として定立する。これが相互承認 *das gegenseitiges Anerkennen* 一般である。いかにしてこの承認がたんにそのものとして、すなわち他の意識の個別的全体において自分を意識の個別的全体として定立するという仕方で、現存しうるかをみることにしよう」（JG I .307/225f.）。

個人が個別的（排他的）なあり方のままで、他人のなかで自分を認識しようとするとき、同様に個別的な他人と対立し、他人との闘争に入る。すなわち、個人は承認を他の個人との闘争によって獲得しようとする。

『イエナ精神哲学Ⅱ』では愛の限界がより明確にされる。第一に、愛においては個人はまだ精神的なものとして承認されるのではない。愛において承認されるのは、自然的規定を受けた（とくに性別をもった）個人である。

「各々は、たんに規定された意志、性格〔男女の性別〕あるいは自然的個人として存在するにすぎない。承認されているのは、その陶冶されていない自然的自己である」（JG II . 210/202）。

第二に、愛においては個人は他人のために献身するのであって、その自立性を放棄する。個人が他者のなかに自分を直観するためには、いったん他者において自分の自立性を否定しなければならないが、愛においてはこの自己否定の契機が優位となる。

「〔愛においては〕各々は他者のなかで自分を知るが、まさにこのことによって、対自的に存在するものとしての自分自身を放棄した」（209/201）。愛において示されることは、「各々がまさに自分の自立性を廃棄する」こと

である(210/202)。

本来の意味での承認,「精神的な承認」は自立的な個人,「自己意識的な対自存在」のあいだでのみ可能である。そのためには,自己意識はもはやたんに家族の一員であるのではなく,家族の外部に出て(あるいは家族を代表して),他の個人との関係に入らなければならない。

「家族[家族の代表としての個人]は全体として自己閉鎖的な他の全体とあい対している。あるいは,完全な自由な個性があい対している。すなわち,ここにはじめて,全体が自己意識的な対自存在であることによって,精神にとっての固有のあり方が存在する」(213/205)。

愛においては個人は他者のために自分の自立性を否定し,他者のなかで自分を非自立的なものとして直観した。これに対して,個人がその自然的規定性(自己閉鎖性,排他性)を克服しないままに,他の個人のなかで直接に自分を自立的なものとして直観しようとするときには,他者の自立性を否定することへ向かう。ここでは承認の獲得をめざす運動は闘争となる。承認においては,自己意識は他の自己意識のなかで自分を否定しながらも,このなかで自分を肯定するが,愛においては,他の自己意識のための自己否定の契機がきわ立たせられ,承認の闘争においては,他の自己意識の否定による自己肯定の契機きわ立たせられる。

6 承認への根源的要求と共同存在

「自己意識」の章において承認論は中核的位置を占めているが(V-1),さらに『精神現象学』の後続の実践哲学的部分においても重要な役割をはたす。しかし,これまでみてきたところでは,相互承認はきわめて抽象的,論理的に説明されている。そのため,その内容についてさまざまな解釈が生じるようになった。そこで,ヘーゲルがもともとこの概念にどのような意味をもたせているのかを,他の著作や論稿をも念頭において,検討しておこう。

ヘーゲルは承認を根本的で、包括的な意味で用いている。そのあれこれの側面を指摘することをもって、承認概念の規定とみなすならば、ヘーゲル自身の豊かな見解を狭めてしまうことになる。自己意識（自立した個人）は単独では自分を自由なものとして実現することはできず、他の個人を承認し、他の個人によって承認されることによってはじめて自分を実現することができるというのが、「自己意識」の章の基本的趣旨である。したがって、承認は人間の存在にとって根源的な意味をもっている。

人間は他人と共同生活を営んでおり、人間にとって他人は不可欠の存在である。他人を共同生活においてこのような相手（パートナー）とみなし、このようなものとして処遇することが、「承認」の基本的意味なのである。共同体においては個人は他人を承認することによって自分もまた他人から承認される。相互承認が共同体において実現されることについて、のちの「理性」の章の序論的部分ではつぎのように説明される。

共同体（「人倫の国」）においては、「自己意識をもった理性の実現という概念が、すなわち、他者の自立性のなかで自分との完全な統一を直観するという概念が……完全な実在性をえる。」そこでは、「他の自由な自己意識のなかで自分自身を確信するという承認された自己意識」が現存している。「ここでは、相互的でないものはなにもなく、個人の自立性が……自分を否定しながらも、自分にとって（対自的に）存在するという肯定的意味をえさせないものはなにもない」（Phä. 195/257f.）。

共同体が本格的に考察されるのは「精神」の章の「A. 真の精神。人倫」の節においてである。そこではつぎのようにいわれる。

「それ〔共同体〕は精神である。これは、諸個人が相互に映現することのなかで自分を維持しているために、自分に対して（対自的に）存在し、また、諸個人を自分のなかに維持しているために、それ自体で〔即自的に〕あるもの、すなわち実体である」（242/319）。

さきに、「精神は絶対的実体であって、そこでは、……自分に対して存在す

るさまざま自己意識が完全に自由で自立的なままで統一しており、我々である我と、我である我々とが統一している」[25]と述べられたが(IV-C-1), このことが「精神」の節で具体化されるに至るのである。

個人は単独で生活することはできないのであり、共同体においてその一人前の成員として承認されることをつうじてのみ生活できる。もし、承認が拒否されるならば、個人の生活は不可能となるか、いちじるしく困難になろう。その典型として、日本の村落にみられた「村八部」があげられよう。ヘーゲルは「自己意識」の章では、人間の共同存在をあらかじめ前提とすることなく(〈我々にとっては〉前提されているが)、自己意識の内的論理に従って、その自己実現にとって承認が不可欠であることを明らかにする。

承認されることは人間存在そのものに根ざす根源的要求であるといえよう。『精神現象学』では「承認への要求」という用語はみられないが、『イエナ精神哲学II』ではつぎのようにいわれる。

「人間は承認されること必要(必然的) *notwendig* とする。……この必要性は人間そのものの必要性である」(JG II.215/206)。

後期の1820年の「小現象学」講義でもつぎのよういわれる。

「私の承認の要求 *Forderung* は、私が他人の意識のなかで認められるということである。」「他人によって承認されることは、最高の絶対的な必要 *Notwendigkeit* である。それは、自己意識が根本において……実現されることをめざす衝動である」⁽⁶⁾。

7 観念的承認と現実的承認

このように、承認は人間生活の根本にかかわっており、個人の個々の性格や能力、行為や仕事を評価したり、賞賛することにつきるのではない⁽⁷⁾。たしかに、人間はだれでも他人から高い評価や評判をえたいという願望をもっている。しかし、個人の個々の側面が評価されても、それは承認への根源的要

求を満足するものではない。例えば、企業においては競争原理が重視されるなかで、「業績」によって人間が評価、査定されつつある(メリットクラシー)。この傾向は教育界にももちこまれ、あたかも「成績」の評価がその子どもそのものの価値づけであるかのような状況が生み出されている。このようななかで、大人も子どもも「人間」として承認されることをいっそう強く渴望するようになりつつあるといえる。

現代社会学においても、「承認の欲求 need for approval」が人間の社会的欲求の基本形態の一つであることが明らかにされつつあるが、この欲求はしばしば社会心理的なものとみなされている。それは、他人からから評価され、賞賛されることと同義とされる⁽⁸⁾。そのさい、他人の評判を気にすることは、他人の意見に依存することであり、非自立的な生き方であるとされる⁽⁹⁾。しかし、ヘーゲルにあっては、他人によって承認されることはけっして直ちに、他人に依存することを意味しはしない。個人の自立は他者から切り離されて実現されるのではなく、他者との協力のなかでえられるのであって、個人は他人をこのような協力の相手として承認し、自分もまた他人からこのようなものとして承認されなければならない。

なお、ヘーゲルも承認の形態の一つとして「名誉 Ehre」をあげている。しかし、名誉は自分や他人の表面的な意識(表象)に対するものにすぎない。ヘーゲルは『法哲学』で、名誉を「自他の表象における承認」と性格づけている(R. § 208)。名誉は人格そのものの表現であることもあるが、〈体面(みせかけ) Ansehen〉や〈虚栄 Eitelkeit〉となることもある⁽¹⁰⁾。

承認はたしかに表象や観念をともなう。しかし、承認の獲得は名誉や評判に獲得に帰されるのではない。ヘーゲルが重視するのは、「表象における承認」を可能とする現実的な関係である。彼は、個人の具体的あり方全体にかんする承認、現実的生活の上での承認を「現存在(生存)の点での承認 Anerkennung in der Existenz」とよぶ。それは、個人が相互に生活を支えあい、保障しあうことを意味する。1822年の「小現象学」講義ではつぎのようにいわ

れる。

「この承認はたんに名誉へ、他人の表象における承認へ向かうのではなく、……人間は現存在の全体において承認されなければならない。」⁽¹¹⁾

名誉を〈観念的承認〉とよぶことができるとすれば、このような承認を〈現実的承認〉と性格づけることができるであろう。ヘーゲルは現実の社会や共同体における人間の自由なあり方を「人倫（人倫性、人倫態）Sittlichkeit」とよぶが、人倫においてはまさに現実的承認が具現される（本論Ⅷを参照）。

なお、承認のなかには、人格性の尊厳の尊重も含まれる。カントは、人格における人間性（人格性）はそのものとして端的に「承認」されなければならない、「価値評価」の対象とされるべきではないと指摘した⁽¹²⁾。ヘーゲルは道徳的人格の尊厳について語ることはまれであるが、良心については、それが「神聖なものとして……承認される」ということが近代人の基本要求であると述べている。ただし、人格や良心の承認は内容を欠いた形式的ものとなりがちであり、このことにヘーゲルは批判を向ける（R. § 137）。

注

1) I の注 8), 9) 参照。

2) アメリカの R.R. ウィリアムズはヘーゲル承認論の研究書において、「他在 other-being」を「自分の他者化 self-othering, self-altering」あるいは「自分の疎遠化 self-estrangement」と同義とみなし、つぎのようにいう。「自己は他者に直面するさいに、自分にたいして他者となる。そして、これらの二重の意味（他者としての他者と他者としての自己）とは分離できない」（Robert R. Williams, *Recognition*. 1992. New York, p. 153. Vgl. *Hegel's Ethics of Recognition*. 1977p. 54f..）。加藤尚武氏は、『エンチクロペディー』の「自然哲学」の邦訳のさいに、理念の「他在」としての自然という叙述部分で「身代わり（他在）」という訳を当てている（『全集』2 a 『自然哲学』上巻、岩波書店、21 頁）。

3) 一方の自己意識は他方の自己意識なしにはありえず、一方の自己意識による他方の自己意識にたいする作用は、他方の自己意識による一方の自己意識にたいする作用なしにはありえない。ここでは、一方、およびその規定は、他方およびその規定へと移

行し、逆にまた、他方、およびその規定は、一方およびその規定へと移行するのであり、両者の規定は相互に交代する。「この運動においては、[さきに悟性の箇所、二つの]力の遊動 Spiel として叙述された過程が、ただし[今度は]意識のなかで繰り返されているのがみられる。この遊動において<我々に対して>おこなわれたことが、ここでは両極[両者の自己意識]に対しておこなわれる。」[32] ヘーゲルは、「意識」の章の悟性の部分で「力とその発現」について考察したつぎのことを想起している。

「他者として登場するもの、それ[力]を発現させるとともに、それを自分自身へと還帰させるよう誘発するものは……それ自身力である。というのは、他者は普遍的媒体としても一者としても現れ、このようにこれらの両形態のいずれも、消えゆく契機として登場するにすぎないからである。」「したがって、一方が誘発するものであるのに対して、他方は誘発されたものであるはずであるという、両者の力のあいだに登場したこのような区別も、諸規定性、さきと同一の交代へと転化する。」(Phä. 97/108f.)

4) 『予備学』に収められた 1808-1809 年の講義でもつぎのようにいわれる。「自己意識の承認はつぎのことにもとづく。各々の自己意識が他の自己意識にとって、自分自身がそうであるものと同一であること、このことが他者に対して存在すること、したがって、自分から区別されたもののなかで自分自身を直観することにもとづく」(Pro. 79, 海老澤訳, 38 頁)。

5) 出典は、III の注 3 で挙げた文献。Ed. by Petry. § 353 [§ 431], p. 334/p. 76.

6) イギリスの近代思想においては、個人の道徳的評価を名誉や評判の獲得に求める傾向が強い。その先駆はホッブズにみられる。彼は、「力への欲望 Desire of Power」をいわば人間の社会的本性とみなしているが、「名誉の欲望 Desire of Honour」をその 1 形態に含めている (『リヴァイアサン』第 1 部, 第 8 章, 水田洋訳, 岩波文庫, 1, 128 頁)。そして、名誉についてつぎのようにいう。「人間の価値 Value……は、他のすべての事物のばあいと同様に、その価格 Price である。それは……絶対的なものではなく、他人の必要や判断に依存するものである。」「われわれが相互に与える価値の表現は、名誉を与えること Honouring,あるいは名誉を奪うこと Dishonouring とふつうよばれるものである」(同, 10 章, 邦訳, 143 頁)。

7) 藤永保編『新版 心理学事典』(平凡社, 1981 年, 353-355 頁)では、「社会的動機づけ」の項目のなかで、社会的欲求の基本形態として、「達成欲求」「親和欲求」「承認欲求 approval motive」「威光欲求[威信欲求] prestige motive」があげられている。後者の二つは一つにまとめることもできよう。小川一夫監修『改定新版 社会心理学辞典』(北大路書房, 1995 年, 165 頁)では、「承認欲求 need for approval」が独立

の項目として扱われている。この面での研究の先鞭をつけたのはH・A・マレーである。彼は28の社会的欲求を、①事物への欲求、②野心・意志・達成・威光への欲求、③権力の行使・抵抗・屈服への欲求、④自他に損害を与えることへの欲求、⑤人のあいの愛情への欲求、に大別し、②のなかに「承認への欲求 recognition」を含めた(「人格の研究」1938年)。W・I・トーマスとF・ズナニエツキはこれにさきだち、社会的願望の形態として、①新しい経験や新鮮な刺激への欲求、②承認への欲求、③支配への欲求、④安全への欲求、をあげた(『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』1918-20年、桜井厚訳、御茶の水書房)。A・H・マズローも基本欲求を、①生理的欲求、②安全の欲求、③所属と愛の欲求、④承認の欲求、⑤自己実現の欲求の階層に分けており、④の内容として自尊心への願望と、承認・地位・評判・威信などへの願望とを指摘している(『動機づけと人格』1954年、小口忠彦監訳『人間性の心理学』、第4章、産業能率大学出版部)。

8) 前注の二つの事典では、D.P. Croune らが、承認欲求の強い人間は、他人への服従性や同調性を強く示すとみなした(1964年)ことが紹介されている。D・リースマンも現代人における「他人志向型」の社会的性格を指摘した(『孤独な群衆』1950年、加藤秀俊訳、みすず書房)。

9) ヘーゲルは『美学講義』で、ロマン派文学が好んで扱った中世の騎士道における名誉がもつ二面性を、つぎのように指摘している。「個人が所有するもののなかに……名誉をつうじて主観性全体の絶対的価値が導入され、このようなものとして自他にとって表象される。したがって、名誉の規準は……、主観がじっさいになにであるかではな、主観がいかにこのように表象されるかにかかっている。」「名誉は仮象(みせかけ) Schein にすぎないとよくいわれる。たしかにそうであるが、詳細にみると、主観性はそれ自身のなかで映現すること Scheinen, 反映すること Widerscheinen である。これは、自分において無限なものが映現するものとして無限性をもつのであり、この無限性によってまさに名誉の仮象は主観の本来のあり方となる」(Ästhetik. WzB. Bd. 14, S. 177, 邦訳『美学』第2巻の下, 1358頁以下)。

10) Ed. by Petry. § 353 [§ 431], p. 336/p. 78.

11) カントが『道徳(人倫)の形而上学の基礎づけ』でつぎのように述べたことは有名である。事物(物件)は人間にとっての手段であり、相対的価値、価格をもち、他のものと交換できるのに対して、人格における人間性は目的それ自体であって、絶対的価値、尊厳をもち、他のなにかと交換することはできない(邦訳『世界の名著』カント, 273, 280頁)。彼はこれをふまえて、後期の『道徳の形而上学』ではつぎのように

いう。「私が他人にたいして抱き,あるいは他人が私にたいして要求できる尊敬は……,他人における尊厳の承認 *Anerkennung*, すなわちいかなる等価物(これにかんしては価値評価 *Wertschätzung* の対象が交換されうる)をももたないような価値の承認である」(『道徳の形而上学』第 37 節, 邦訳, 同上書, 629 頁)。カントのこのような主張は, 注 5 でみたホッブズの見解とは対照的である。